

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

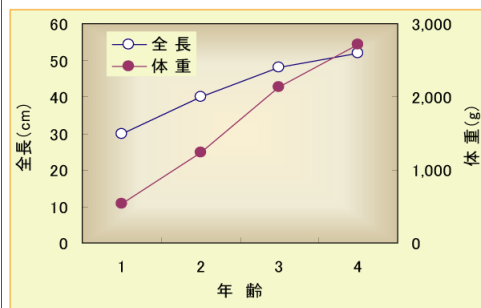
系群名 瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳程度
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 主に4～5月、関門内海、備後・芸予瀬戸、備讃瀬戸など
索餌期・索餌場: 0歳は夏～秋季、1歳は春～秋季、内海域
食性: 稚魚期は底生性の小型甲殻類、未成魚期以降はイワシ類などの魚類や甲殻類
捕食者: 不明

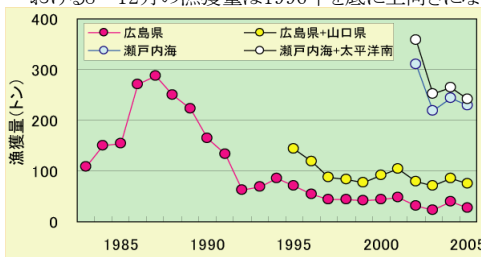


漁業の特徴

親魚は春季に産卵場で定置網、吾智網、釣り、敷網等で漁獲される。幼魚は産卵場の周辺で小型底びき網、定置網で漁獲され、成長に伴って秋季には外海に近い伊予灘、豊後水道及び紀伊水道で延縄で漁獲される。日本海や東シナ海・黄海に回遊する個体もある。漁獲量はフグ類に一括されていた。広島県と山口県のトラフグ漁獲量は1995年の144トンから減少傾向で推移し、2005年には76トンになった。瀬戸内海及び太平洋南では2002年から漁獲量が把握され、2005年は243トンであった。

漁獲の動向

2005年春季の親魚を対象とした漁は東部の庵治(香川)では4トン、西部の走島(広島)ほか5つの漁協では13トンで漁獲した。2005年秋～冬季の未成魚を対象とした漁は東部の椿泊(徳島)ほか3漁協では0.4トン、西部の姫島(大分)ほか6漁協では21トンで漁獲した。当歳魚を対象とした漁は東部での状況は不明であるが、西部の田尻(広島)における8～12月の漁獲量は1996年を底に上向きになっていたが、2003～2005年は少ない。



資源評価法

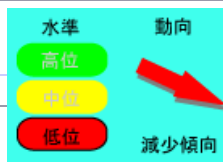
1995～2005年における西部の月別漁獲物全長組成を正規分布(年齢)群に分け、また宮崎では月別漁獲物体重組成を年齢別体重で年齢群に分けた。この年齢組成を地域別漁獲量を用いて瀬戸内海と太平洋南に引き延ばした。これを基に、自然死亡係数を0.25として、Pope(1972)の近似的によるコホート解析を行った。また1994年以前では標本漁協での親魚、未成魚、当歳魚別漁獲量の経年推移を資源量指標として資源水準と動向を評価した。

資源状態

コホート解析で求めた2005年の資源量は1995年の46%で、11年間に半減した。資源量指標の経年推移から、資源水準の低下は1995年以前に大きく、2005年の親魚量水準は資源水準が高かったと考えられる1989年以前の7年間の10%程度と考えられた。

管理方策

資源水準が低い、コホート解析を行った最近11年間で最も資源量の多かった1995年の水準を当面の回復目標とした。現在の漁獲圧を継続した場合、資源水準が低下すると予測された。管理基準として、 $0.8F_{30\%}$ 、 $0.8 \cdot 0.8F_{30\%}$ を採用してABCを算出した。



	2007年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	93トン	$0.8F_{30\%}$	0.33	22%
ABCtarget	75トン	$0.8 \cdot 0.8F_{30\%}$	0.26	18%

資源評価のまとめ

- 親魚量は低位、1996年以降親も仔も少ない
- 加入尾数は減少傾向で、2005年の加入尾数は1995年の加入尾数の44%
- 資源水準は低位、動向は減少傾向

管理方策のまとめ
- 資源の減少は過剰な漁獲が原因 - 資源回復を図るには、漁獲量の抑制や種苗放流の強化が考えられる - 親魚と未成魚で漁獲される地域と漁法が異なるため、バランスを考えた資源管理が必要 2歳頃から一部が東シナ海や日本海西部に回遊し漁獲されるので、これらの地域と連携して資源管理を行う必要がある

資源評価は毎年更新されます。